

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月21日現在

機関番号：24701

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2009 年度～2011 年度

課題番号：21592861

研究課題名（和文） 自閉症スペクトラム障害に対するペアレンティング・プログラムの確立に関する研究

研究課題名（英文） Study of Stepping Stones Triple P (Positive Parenting Program) with parents of a child diagnosed with an Autism Spectrum Disorder.

研究代表者

柳川 敏彦 (Toshihiko Yanagawa)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号：80191146

研究成果の概要（和文）：自閉症スペクトラム障害（ASD）の子どもは、特徴的な発達と行動の問題からしばしば、親にとっての育てにくい子となる。障害のある子どもを持つ養育者を対象に開発されたステップングストーンズ・トリプル P (SSTP) を、自閉症スペクトラム障害 (ASD) の子どもをもつ養育者に実施し、その効果の検証を行った。和歌山、大阪、京都、愛知、佐賀に在住し、ASD と診断された 2～10 歳の子どもの養育者を A 群（介入 - 3 か月フォローアップ：n=34、母親年齢 37.5 ± 3.8 、子ども年齢 4.8 ± 1.9 ）、B 群（2 か月待機 - 介入：n=19 母親年齢 36 ± 5.1 、子ども年齢 4.6 ± 1.4 ）に分けた。評価方法は、子どもの状態としてアイバーク行動チェックリスト（ECBI）、子どもの長所・短所質問票（SDQ）、親の状態として子育てスタイル（PS）、親の精神状態（DASS）、子育ての自信（PSBC）の計 5 つの質問票を用いた。B 群（n=19）待機では、すべての質問票で有意な変化は認めなかった。グループ SSTP を施行した A+B 群（n=53）では、DASS 以外の質問紙で有意な効果が得られ、子どもでは、ECBI の問題行動の強さと頻度の改善、SDQ における多動面の改善が目立ち、養育者では、PS の過剰反応の改善と PSBC の改善が目立った。3 か月後のフォローアップ：A 群（n=34）においても、ECBI、PS、PSBC の有意な持続効果が得られた。グループ SSTP は、ASD の養育者の子育て支援として有用であった。

研究成果の概要（英文）：The child diagnosed with an autism spectrum disorder has both peculiar developmental and behavior problems. The child often becomes a difficult child for parents. The aim of this study was to measure the effect of Stepping Stones Triple P which was developed for parents who have the child with some disabilities. The participants were parents who have 2-to 10-year-old child diagnosed with an autism spectrum disorder (ASD). We divided into two groups by randomized allocation. Group A (Intervention-Follow-up Group) consisted of 34 mothers whose ages were 37.5 ± 3.8 and their children's ages were 4.8 ± 1.9 . Group B (Waiting-Intervention Group) consisted of 20 mothers aged 36 ± 5.1 and children aged 4.6 ± 1.4 . We assessed by the use of 5 questionnaires, such as Eyberg child behavior checklist (ECBI), Strength Difficulties Questionnaire (SDQ), Parenting Style (PS), Depression-Anxiety-Stress Scale (DASS) and Problem Setting and Behavior Checklist (PSBC) at the point of pre, post-intervention and 3 month follow up conditions. We compared the scores of each questionnaire by paired t-test. We evaluated statistically significant $p < 0.05$. There were not any changes among waiting group (B: n=19). We identified short-term improvement on almost all measures except on DASS among intervention group (A+B: n=54). At long term follow-up after 3 months, some measures (ECBI, PS, PSBC) showed positive continuing effects among follow-up group (n=34). Stepping Stones Triple P was useful for the child with ASD and for the parents.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：育児不安、自閉症スペクトラム障害、子ども虐待、ペアレンティング、ランダム化比較試験

1. 研究開始当初の背景

(1) 自閉症、アスペルガー症候群、特定不能の広汎性発達障害などの各疾患を広汎性発達障害の連続体の1要素として捉えた自閉症スペクトラム障害（autism spectrum disorder、以下ASD）の子どもは、対人的相互反応の発達の障害、言語または非言語的なコミュニケーション能力の障害や常同的な行動・興味・活動の存在で診断される。

(2) ASDを中心とした発達障害は、その障害が表面的にわかりにくく、母親は周囲や社会から精神的に孤立しがちになり、精神的ストレスが高い状況にあることが指摘されている。発達障害の子どもは、同年齢の子どもに比べて、攻撃性、破壊性、反抗など様々な問題行動を示す可能性が高いことが報告され、就学前の子どもの難しい行動は、放置すると思春期や成人期になっても継続し、重症度を高めていく傾向がある。

(3) ASDの子どもをもつ家族への支援は極めて重要であるが、わが国では子どもの療育的支援が中心であり、親は子どもの障害にどのように対応してよいか、多くの悩みや不安を抱えながら日々、育児を行っている現状にある。

2. 研究の目的

オーストラリア・クイーンズランド大学のマツサンダースらにより開発された、障害のある子どもの親を支援するためのペアレンティング・プログラム「ステップストーンズ・トリプルP（以下、SSTP）を、ASDの子どもをもつ親に実施し、その効果の検証を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) トリプルPの概要：トリプルPは、認知行動療法の理論に基づいた親の子育てへの教育的介入手段である。SSTPは、障害のある子どもをもつ親のために開発されたもので、親にとっては子どもの個別の問題を把握

し評価するために標準型トリプルPに比べ、プログラムの時間を多くとり、さらに障害の子どもが理解しやすいように介入が細くなされている。日本での実施にあたり、日本版SSTPの教材として、プログラム・ファシリテータ養成講座用教材、および親を対象としたプログラム教材を翻訳・作成した。

(2) 研究の対象：和歌山、大阪、京都、愛知、佐賀に在住し、医療機関または療育・訓練機関において医師によりASDと診断された2～10歳の子どもの親を対象とした。トリプルP実施は、医療機関、療育・訓練機関、保健所・保健センターおよび地域子育てサークルにおいて一定期間掲示募集を行い、別の日に設けた説明会において研究趣旨に賛同した親である。対象はA群（介入-3か月後フォローアップ）、B群（2か月待機-介入）の2群を設定した。京都（A=10 B=10）、大阪（大阪A=11 B=8）、和歌山（A=9 B=7）では、2群割り当ては研究者が無作為にあらかじめ割り当てたが、予告したプログラムの実施期間に合わせ親の希望を取り入れ、ほぼ同数となるように2群に分配調整した。なお、愛知（8人）、佐賀（10人）ではA群のみの設定となった。プログラム実施期間は、平成22年7月から平成23年4月までとした。

(3) 倫理的配慮：個人情報取り扱いに十分な配慮を行うこと、回答の内容は個人が特定されないよう匿名化、数値化して扱うこと、結果については研究目的以外に使用することがないこと、また個人ではなく集団として結果を公表することを文書で説明し、同意を得たものを調査対象とした。研究は和歌山県立医科大学倫理委員会の承認が得られたものであり、さらに実施地域ごとの機関倫理委員会においても改めて承認を得た。

(4) 研究デザイン：A群（介入-フォローアップ群）は、①プログラム実施直前、②プログラム実施直後、③プログラム3か月後、B（待機-介入群）は、①'プログラム2か月前、②'プログラム直前、③'プログラム直後と、両群

とも3回数ずつ質問票に回答した(図1)



図1. 研究デザイン

(5) SSTP の内容 :

SSTP は「障害のある子どもをもつ家族のためのステッピングストーンズ・トリプルP」グループワークブックを教材とし (Sanders, 2010 日本語版)、養育者 8~11 人のグループで実施した。1 セッション (150 分) を週 1 回行い、計 9 セッションを実施する。第 1~5 週で、教材にワークブック、ビデオまたは DVD を使用し、前向き子育ての考え、子どもの行動記録のための講義、および対応スキル習得のためのロールプレイを行う。第 6~8 週では、電話セッションにより子育てスキルの実施状況の確認や改善策を話し合い、9 週で振り返りとまとめを行う。なお、プログラムを提供するトリプルP事務局は、実施の標準化のためファシリテーター養成ワークショップを定期的に実施している。この養成ワークショップの参加者に認定試験を行い合格したもののみがプログラム実施が可能である。

(6) 質問紙 : 参加した親とその子どもの年齢や家族構成などの属性に加え、複数の質問票を 1 冊の冊子にまとめた調査票を配布し、親が直接記入した。質問冊子の記入所要は 30~60 分であった。

1) 子どもに関すること

① アイバーク子ども行動調査票 (ECBI: Eyberg Child Behavior Inventory) 36 項目)

ECBI は、2~16 歳の子どもの問題行動を量る尺度である。36 項目の質問についてそれぞれ 1 項目がどの頻度で認められるかの程度を 7 段階に分けて計算する強度スコア (36~252 点) と、その問題行動が、親にとって問題と感ずるかどうかの問題スコア (0~36 点) で計算される。強度スコアの問題となる臨床域は 131 点以上で、問題スコアの臨床域は 15 点以上である。

② 子どもの長所短所調査票 (SDQ: Strengths and Difficulties Questionnaire, 25 項目)

SDQ は、3~16 歳の子どもの社会的に好ましい行動と難しい行動に対する親の認識を測る行動審査尺度である。5 領域 (感情的症状、行為問題、不注意/多動、交友問題、社会的行動) について評価を行う。各領域の最低スコアが 0 で、最高スコアが 10 である。難しい行動の総合スコアは社会的行動スケールを除く 4 スケールのスコアを合計することで計算され値の高さが困難性を示し、社会的行動は、値の高さが好ましい行動(長所)と

して評価される。

2) 親に関すること

③ 親の順応 = 抑うつ不安ストレススケール (DASS: Depression Anxiety Stress Scales, 42 項目)

DASS は、大人の抑うつ、不安、ストレスの症状を測る尺度で、1 項目 0~3 点の 4 段階で計算され、各 3 スケールの最低スコアが 0 で、尺度の最高スコアが 42 で、値の高さが問題と判断される。

④ 親の子育てスタイル (PS: Parenting Scale, 30 項目)

PS は、非効果的なしつけである 3 つの子育てタイプ、「手ぬるさ」(寛容すぎるしつけ)、「過剰反応」(権威主義的なしつけ、怒り、意地悪さ、短気を面に出す)、「多弁さ」(過剰に長い叱責、または話しに頼る方法や身体的な暴力の使用) を測定するもので、3 スケールとも値の高さが問題とされる(表 1-③)。

⑤ 親の子育てに関する自信の程度 (PSBC: Problem Setting and Behaviour Checklist, 28 項目)

PSBC は、親の子育てに関する自信の程度を測定する尺度である。項目に対して親の自信の程度を 1~10 点で評価する。点数は合計で 28 点~280 点で分布し、合計点数が高値であるほど自信度が高いことになる。

(7) SSTP に参加した A 群(n=48)、B 群(n=25)

において、3 回の各々の質問票において欠損のあったものは分析から除外し、質問項目の記入が完全に行われた A 群 (n=34)、B 群 (n=19) を分析対象とした。子どもの年齢、母親の年齢の比は t 検定、性別、子どもの同胞の数は χ^2 乗検定を行った。質問票の結果は、スコアの平均値と標準偏差で示し、プログラム前後の比較は、ペアード t 検定を行った。いずれの検定も $P < 0.05$ を有意とした。

4. 研究成果

(1) A 群、B 群の特徴 : プログラム参加者はすべて母親であった。A 群の母親年齢 37.5 ± 3.8 歳、子ども年齢 4.8 ± 1.9 歳、B 群の母親年齢 36 ± 5.1 歳、子ども年齢 4.6 ± 1.4 歳と 2 群間に有意差はなく、両群の子ども性別、同胞数においても差は認められなかった。

A 群の子どもは、ECBI は強度、問題スコアとも正常域上限で、SDQ では困難度合計、交友問題、社会的行動が臨床範囲にあり、不注意/多動は境界範囲を示した。母親は、DASS では 3 スケールとも正常域であったが、PS ではいずれの子育てスタイルも臨床範囲であった (表 3)。

B 群の子どもは、ECBI は強度、問題スコアとも正常域で、SDQ では交友問題、社会的行動が臨床範囲にあり、困難度合計、行為問題、不注意/多動が境界範囲を示した。母親は、DASS では 3 スケールとも正常域であったが、

PS ではいずれの子育てスタイルも臨床範囲であった。

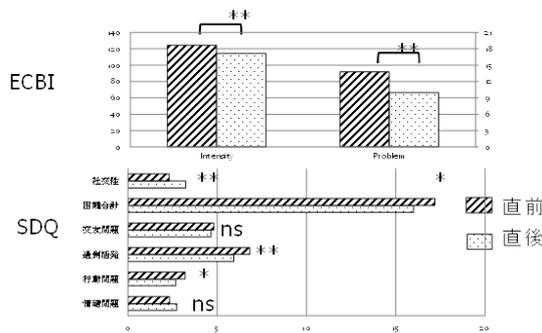
なお、子どもに関する質問票 ECBI, SDQ について、親に関する質問票 DASS, PS, PSBC について、介入前のアセスメントにおいて A, B 群の 2 群の有意な差は認めなかった。

(2) 2 か月待機の変化について

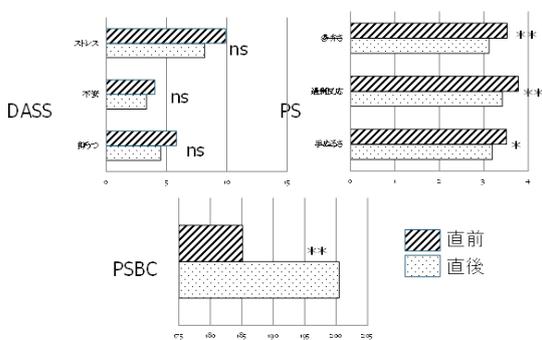
B 群において、SSTP の介入なく、2 か月間の自然経過を観察したところ、介入 2 か月と介入直前を比較したところ、5 つの質問票すべてにおいて変化は認められなかった。

(3) 介入直後の効果

A 群、B 群を合わせた人数において、介入直後の効果を比較した。ECBI、SDQ、PS、PSBC の質問票において有意な改善が得られ、子どもでは ECBI、SDQ の不注意/多動の減少、社会的行動の増加という要素の著明改善が得られた ($p < 0.01$)。親では、PS(手ぬるさ、過剰反応、合計)、子育ての自信を示す PSBC の著明な改善が得られた。親の DASS においても有意差はないが、不安、ストレスの要素の改善が得られた (図 2, 図 3、表 1)。DASS は個人差が目立ったため、臨床域の割合で示すと、抑うつ 24.5%、不安 11.3%、ストレス 24.5% で、SSTP 終了直後の改善率は、それぞれ 86.7%、66.7%、80.0%であった(表 1)



ns は有意差なし、*は $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$
図 2. A+B 群 n=53 の子どもの変化



ns は有意差なし、*は $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$
図 3. A+B 群 n=53 の母親の変化

表 1. A+B 群 n=53 の介入直後の効果

	アセスメント 分析値	A+B群 (n=53)				
		介入前		介入直後		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
ECBI	強度スコア	124.55	26.58	114.31	25.47	**
	問題スコア	13.78	6.52	10.02	7.33	**
SDQ	困難度合計	17.17	4.54	15.96	5.22	*
	感情的症状	2.35	1.78	2.70	2.42	ns
	行為問題	3.20	1.78	2.65	1.66	*
	不注意/多動	6.83	2.11	5.91	2.07	**
	交友問題	4.78	2.04	4.70	2.35	ns
	社会的行動	2.35	2.50	3.31	3.34	**
DASS	合計	19.77	16.70	16.06	16.30	ns
	抑うつ	5.83	7.00	4.53	6.31	ns
	不安	4.04	3.63	3.36	3.70	ns
	ストレス	9.91	7.37	8.17	7.59	ns
PS	合計	3.55	0.54	3.19	0.73	**
	手ぬるさ	3.51	0.69	3.42	1.05	**
	過剰反応	3.78	1.07	3.12	1.01	**
	多弁さ	3.52	1.03	3.22	0.65	*
PSBC	合計スコア	183.69	45.39	198.52	49.69	**

ns は有意差なし、*は $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$

表 2. A+B 群 n=53 の SDQ の臨床域の割合と、プログラム直後の改善率、正常化率

	抑うつ	不安	ストレス
臨床域	24.5%	11.3%	24.5%
改善率	86.7%	66.7%	80.0%
正常化率	53.3%	50.0%	66.7%

(4) 介入 3 か月後の持続効果

A 群において、介入 3 か月後の評価では、子どもの ECBI、親の PS、PSBC の 3 質問票で持続効果が認められた。なお、SDQ では有意ではないが感情的症状以外すべての要素で値の改善が得られ、DASS は合計スコアの有意な改善が得られた

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- ① 柳川敏彦、平尾恭子、加藤則子、上野雅子ら、自閉症スペクトラム障害の子どもの家族のためのペアレント・プログラムの実践 ―グループ・ステッピングストーンズ・トリプル P の効果について―、子どもの虐待とネグレクト、査読有、投稿中

〔学会発表〕(計 4 件)

- ① 柳川敏彦、加藤則子、澤田いずみ、藤田一郎、家本めぐみ：地域におけるトリプル P (前向き子育てプログラム) の展開 ―5 段階レベルの実践とプログラムの評価―、第 17 回日本子ども虐待防止学会、2011. 12、つくば市。

- ② 柳川敏彦, 加藤則子, 平尾恭子, 上野昌江, 山田和子: 自閉症スペクトラム障害の子ども¹の家族のためのペアレント・プログラムの実践 ―グループ・ステップングストーンズ・トリプルPの効果について―. 第17回日本子ども虐待防止学会, 2011. 12, つくば市.
- ③ 平尾恭子, 柳川敏彦, 山田和子, 家本めぐみ: 自閉症スペクトラム障害の子ども¹の家族のためのペアレント・プログラムの実践(第2報) ―グループ・ステップングストーンズ・トリプルPの効果について―. 第17回日本子ども虐待防止学会, 2011. 12, つくば市.
- ④ Toshihiko Yanagawa: Implementation of Stepping Stones Triple P (Positive Parenting Program) with parents of a child diagnosed with an Autism Spectrum Disorder. 第9回 ISPCAN 国際子ども虐待防止学会アジア・オセアニアカンファレンス, 2011.10, New Delhi, India.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://www.triplep-japan.org/>

(トリプルPジャパン)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳川 敏彦 (TOSHIHIKO YANAGAWA)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号: 80191146

(2) 研究分担者

加藤 則子 (NORIKO KATO)

国立保健医療科学院・障害保健部・部長

研究者番号: 30150171

上野 昌江 (MASAE UENO)

大阪府立大学・看護学部・教授

研究者番号: 70264827

(3) 連携研究者

山田 和子 (KAZUKO YAMADA)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号: 10300922